

所属・資格 哲学科・助教

申請者氏名 磯部 笑子

研究課題		J.S.ミルの質的快樂説の検討
報告の概要	研究目的 および 研究概要	現代の主要な倫理学説である「功利主義 utilitarianism」は、「幸福主義 eudaemonism」をその理論の中核としている。幸福主義が追究する「幸福」については、主として、幸福を快樂と考える①量的快樂説と、②質的快樂説、そして幸福を選好の充足と考える③選好充足説、以上三つの立場があるとされる。ミルによって示された②質的快樂説は、効用（＝幸福）を快樂または苦痛の欠如とする点ではベンサムの立場（①量的快樂説）と同様であるが、ベンサムとは異なり、快樂の単純な数量化を批判し、快樂の質の優劣に着目したものである。ミルは、ある快樂が望まれているからといって、その快樂が望ましいとは限らないことを指摘したうえで、いずれの快樂が本当の意味で望ましい（質が高い）かは、質の異なる快樂を同程度によく知っている人によって決定されるとした。他方、ミルの功利主義における②質と③選好の関係については、十分に論じられていない。本研究では、ミルの功利主義を検討し、それと上記③選好充足説との異同を明らかにすることを目的とする。
	研究の結果	一般的に、功利主義の中核となっている幸福主義には、幸福を快樂と考える「快樂説」と、幸福を選好の充足と考える「選好充足説」とがあり、ミルの功利主義は前者の快樂説であると理解されている。そのうえで、ミルの主張する快樂説は、ベンサムが提唱する快樂の数量化（量的快樂説）を批判し、快樂の価値が快樂の質の優劣によって判断されることを主張するものと考えられている。しかし、ミルは、ベンサムの快樂の数量化によって、どの快樂がより価値の高い快樂であるかということ判断することはできず、質だけでなく（ベンサムが重視した）量も考慮に入れるべきであるとも主張しており、快樂を質のみで判断すべきだとは考えていない。そして、ミルは、快樂Aと快樂Bの二つの快樂のうち、どちらがより価値があるかを定めるのは、その両方を知っている人であるという考え方を示した。以上のことから、ミルの功利主義については、それを従来のように単純に「質的快樂説」として分類するのではなく、質的快樂説と量的快樂説の両者を取り入れた新たな解釈を示すことが必要であると考えられる。さらに、快樂の価値の判断（選択）を、経験によって快樂の質を熟知している人物に委ねるというミルの考え方は、その人物の選好の充足によって快樂の価値が判断されるというように解釈することが可能である。このように考えると、〈ミルの功利主義は質的快樂説である〉という従来の見方は疑問視され、ミルの功利主義を選好充足説の先駆として捉え直すことが可能となる。以上のように、本研究によって、従来は単純に質的快樂説と考えられてきたミルの功利主義が、実は選好充足説の先駆的見解となることが明らかにされた。
	研究の考察・反省	ミルは、倫理や道徳は、事実言明ではなく、「～しなければならない」、「～すべきだ」というような命令法によって表現されると考え、そして、このような命令法はすべて「技術 art」であると主張した。そして、技術の目的は、人々が是認するような、幸福を増進することであることを示した。本研究では、人々が是認するような「望ましさ」についても具体的に考察する予定であったが、それについて十分な時間を割くことができなかった。

<p>研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所</p> <p>研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>今年度は別の研究テーマによる論文を執筆したため、本研究に関する具体的な成果を出すことができなかった。そのため、本研究の成果を、来年度論文にまとめる予定である。</p>
--	---